

「茶旅」

”こぼればなし“

(24)

107歳の 思いが詰まった紅茶

コラムニスト 須賀 努



10月下旬、3年に一度の世界お茶まつりが静岡で開かれた。会場では茶葉・茶器販売のブースは勿論、お茶関連の様々なイベント、お茶席、セミナーなど、日本のみならず、中国や台湾、インドなど世界からの参加者があり、日本のお茶好きも続々と集まってきて、世界のお茶に出会える、まさにお茶のお祭りに相応しい賑わいとなっていた。初めて参加者した筆者も『お茶のシルクロード〜万里茶路に行く』というセミナーで茶旅を報告させて頂く機会を得た。感謝したい。またこれまでの茶旅で出会った多くの方々とここで再会できたことは、茶旅をやっ

て、世界のお茶に出会える、まさにお茶のお祭りに相応しい賑わいとなっていた。初めて参加者した筆者も『お茶のシルクロード〜万里茶路に行く』というセミナーで茶旅を報告させて頂く機会を得た。感謝したい。またこれまでの茶旅で出会った多くの方々とここで再会できたことは、茶旅をやっ

に適した土地を確保し、数年前から茶樹栽培を開始、紅茶作りが始まった。この紅茶作りには実は魏社長の恩師であり、中国茶業界のレジェンドとも呼ばれている、福州市在住の張天福先生の思いが込められていた。恐らく中国で張先生の名前を知らない茶業関係者はいないと言ってよい有名人であり、かつ現在数え歳107歳になられる張先生が、最後に自分の思いを紅茶にしたいと希望され、魏社長がそれを支えている、というのが真相のようだ。数々の品種を植え、農業などは使わず、誰もが安心して飲める、美味しいと感じられる紅茶を目指している。

張先生は1910年生まれ、民国時代の混乱期に福建省に茶の実験農場を作り、多くの茶業人材を育てると共に、品種改良、製茶技術の発展に努め、戦前の日本や台湾にも視察に訪れたことがあるらしい。新中国建国後も中国の茶業のために尽くしていたが、



魏社長から最高金賞受賞報告を受ける張天福氏

50年代に右派とみなされる。その後文化大革命を含む20年以上不遇の時代を過ごす、その中でも茶の研究を続けていたという精神力の持ち主。名誉回復された1980年以降、既に70歳を超えていたが、多くの茶に関する活動を行い、中国のみならず、台湾でも有名になっている。100歳の記念に作られたご本を頂戴したが、『茶

葉人生』というその標題通り、一生を茶業に尽くした方である。因みにその本は中国語で700ページにも及ぶ。10月初め、福州を訪ねたが、ちょうどその日、その時、魏社長は張先生を訪問しようとしたタイミングであり、何と筆者も同行することを許された。4年前に一度お会いしていたが、その時は自分の足で立ち、電話で栽培についてしっかりとした口調で先輩に指示されていたのが印象的だった。100歳を超えても尚この情熱、その思いが、今回の受賞茶、金元泰に繋がっている。

全く思いもよらないことだった。しかもその日、魏社長が張先生を訪問した理由、それが世界緑茶コンテストで最高金賞を受賞した、まさにその報告だったことは、日本人の筆者にとっても何とも光栄なことであり、またご縁を感じるものだった。車いすに座った先生はその受賞を喜んでくれ、大事そうに自らの関わったお茶の缶を撫でていた。そのしぐさは何とも可愛らしく、まるで子供のようであり、しかし慈愛に満ちたものだった。希望の叶った人、というのは、このような顔をするのだろうか、しばし見とれてしまった。